

平成28年 久留米市政10大ニュース

1位は『久留米シティプラザオープン』

平成28年の久留米市政10大ニュースを、次のとおり発表します。

順位	項目
1	久留米シティプラザオープン ～37万人以上が来場し、中心市街地の賑わいづくりが進む
2	久留米市美術館誕生 ～石橋美術館の歴史と正二郎氏の理念を引き継いで
3	熊本地震の被災地を支援 ～市民の皆さんとともに
4	宮ノ陣クリーンセンター稼働 ～南北2箇所処理体制が整う
5	5年間で人口が2,000人以上増加 ～地方創生の取り組みが進む
6	進む子ども対策 ～次世代育成環境ランキングで中核市の2位にランクアップ
7	久留米の魅力発信を強化 ～アンテナショップの都内開設が決定し、くるフェスも初開催
8	教育改革を推進 ～第3期教育改革プランを策定し、英語教育などの充実が進む
9	農業振興の取り組みを充実 ～農産物のブランド化を進め、過去最大の補助を実施
10	ふるさとくるめ応援寄付が好調 ～12億円を突破する勢い
次点	◎自転車が似合うまちづくりを推進 ◎理化学研究所の機能移転へ第一歩 ◎25年ぶりのG1競輪を開催

※選定の経緯

各部の10大ニュース全169項目の中から、各部の次長等で構成する広報戦略会議の議長（総合政策課長）、副議長（総務部次長・協働推進部次長）、広報課長が24項目を抽出。同会議の委員15名の順位付けを経て特別職などで協議・調整を行い、決定しました。

平成28年 久留米市政10大ニュース

【1 位】

久留米シティプラザオープン

～37万人以上が来場し、中心市街地の賑わいづくりが進む

平成23年2月に施設整備の方向性を発表して以来、将来の久留米市の発展・向上を目指し、心豊かな市民生活の実現、広域的な求心力づくり、街なかの賑わい創出に向けた戦略的な拠点施設として、25年度から整備を進めてきた久留米シティプラザが、4月27日にオープンしました。

当日開いた開館記念式典には、延べ約3,200人が来場。久留米市出身で市民栄誉賞を受賞した元競輪選手の中野浩一さん、久留米市文化章受章者で歌手の藤井フミヤさん、久留米ふるさと特別大使で俳優の田中麗奈さんも駆け付けました。

開館以降、オープニングイヤーを飾る様々な自主・提携事業や市民公募事業などを実施。ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の公演をはじめ、人気俳優が主演する舞台や、地元出身のミュージシャンの公演などに多くの皆さんが訪れました。また、日本災害看護学会や日本原子力学会などの大型コンベンションも開催。全天候型に生まれ変わった六角堂広場では、週末などに様々なイベントが開かれ、平日に実施した「まちなか遊園地」は子どもたちに大人気でした。

11月末時点での総来場者数が37万人以上に達するなど、久留米シティプラザのオープンを契機に中心市街地の賑わいづくりが進んでいます。

また、久留米シティプラザの開館に伴い、これまで多くの皆さんに利用されてきた久留米市民会館は、その役割を7月末で終え、47年の歴史に幕を閉じました。

【2 位】

久留米市美術館誕生

～石橋美術館の歴史と正二郎氏の理念を引き継いで

石橋美術館の開館60周年の節目に当たる10月1日に、石橋財団から運営が久留米市へ移行。久留米市美術館に生まれ変わって、11月19日に開館しました。初代館長には、檜原利則市長が就任しました。開館式には、石橋美術館を市に建設寄贈した石橋正二郎氏の孫に当たる石橋財団の石橋寛理事長も出席し、檜原市長、別府好幸市議会議員とともにテープカットを行いました。

二つの開館記念展「2016 ふたたび久留米からはじまる。九州洋画」と「九州をあそぼう ダンボールアート遊園地inくるめ」も同日にスタート。石橋財団の協力で、国の重要文化財である青木繁の「海の幸」「わだつみのいろこの宮」、藤島武二の「天平の面影」「黒扇」の4点の展示も実現しました。併せて、市の発展に大きく貢献した石橋正二郎氏の足跡や人となりなどを紹介する全国初の一般公開施設「石橋正二郎記念館」が、石橋美術館別館から生まれ変わって誕生しました。

さらに、「石橋文化センター全体を一つのミュージアムと捉えた活動」を具現化する取り組みとして、子どもたち、大学生、アーティストらによる新たな創作アートプロジェクトが動き出しました。

市美術館は、正二郎氏の「世の人々の楽しみと幸福の為に」という崇高な理念と、石橋美術館の伝統を引き継ぎつつ、新たなビジョン「とき・ひと・美をむすぶ美術館」の下、魅力的な展覧会の開催や四季折々のイベントなどとの連携を通して、美術に触れる楽しさを伝えていきます。

【3 位】

熊本地震の被災地を支援

～市民の皆さんとともに

4月14日、16日の二度にわたって震度7の大地震が熊本で発生しました。これを受けて、檜原利則市長を本部長とする「平成28年熊本地震・久留米市救援本部」を設置し、被災地への職員派遣や避難者への支援を実施。市民の皆さんとの協働で、救援物資や義援金の送付、災害ボランティア派遣などの取り組みを行いました。

給水活動や避難所運営、建物の被害調査、健康相談、災害廃棄物の受入などのため、7月末までに延べ621人の市職員を被災地へ派遣。8月からは、3人の職員が熊本県益城町で倒壊した家屋の公費解体撤去業務や道路、河川、下水道施設の復旧業務に当たっています。

また、熊本地震により久留米市へ避難された皆さんに対し、市営住宅40戸の無償提供や被災児童・生徒の受け入れ、国民健康保険料の減免など、各種の負担軽減を行いました。

さらに、被災地で必要とする救援物資や義援金の募集、久留米市初となる災害ボランティアバスの運行を行い、多くの市民の皆さんにご協力をいただきました。

市は引き続き、被災地の復旧・復興に向けた息の長い支援を行っていきます。

【4 位】

宮ノ陣クリーンセンター稼働

～南北2箇所処理体制が整う

平成18年度から宮ノ陣町八丁島地区に整備を進めてきた宮ノ陣クリーンセンターが、6月16日に本格稼働を開始。これにより、上津クリーンセンターとの南北2箇所での、長期にわたる安定したごみ処理体制が整いました。

同センターの稼働に併せて、4月から容器包装プラスチックや小型家電などを加えた新たな分別収集を行うとともに、粗大ごみ収集制度の全市統一や、市の指定ごみ袋の価格と仕様の見直しを実施し、さらなるごみ減量・リサイクルに取り組みました。

また、同センターの本格稼働に先立ち、4月17日に市民の皆さんの環境学習拠点となる環境交流プラザがオープン。11月末時点で約28,000人が来場しました。

なお、同センターの稼働により、八女西部広域事務組合で対応してきた城島町と三潴町のごみ処理が市内でできるようになることから、同組合を3月で脱退しました。

【5 位】

5年間で人口が2,000人以上増加

～地方創生の取り組みが進む

平成27年10月1日実施の国勢調査確定値で、久留米市の人口は304,552人でした。5年前の調査と比べて2,150人増加。住民基本台帳人口も25年5月以降、今年12月まで44箇月連続して前年同月を上回るなど、キラリ創生総合戦略の成果目標である31年度末の人口30万5,000人の維持に向けて着実に推移しています。

9月には、総合戦略の進捗状況について、産業界、金融機関、高等教育機関、メディア及び市民団体などで構成する外部検証会議を開催。より効果的な推進に向けて、幅広い意見の聴取を行いました。

また、市への移住や定住を進めるため、4月に総合政策部へ移住定住促進センターを設置。同センターと東京事務所、各総合支所に移住コンシェルジュも配置しました。

【6 位】

進む子ども対策

～次世代育成環境ランキングで中核市の2位にランクアップ

「子どもの笑顔があふれるまち」を目指し、子育て支援の充実に向けた取り組みを進めました。

4月、学童保育所の対象学年を6年生までに拡大。23校区で受け入れを開始しました。また、幼児教育研究所内に医師が常駐し、より丁寧で数多くの専門相談に対応できるようになりました。この他、市内4箇所目の病児保育施設が三潞町にオープンし、事業所内保育事業所2園も開設されました。

6月には、保育所などで3歳以上児にも温かいご飯を提供する完全給食を導入。また、子どもの貧困対策の新たな取り組みとして、「子ども食堂」の運営や施設の整備に要する経費への補助を開始しました。さらに10月診療分から、通院医療費の助成対象を「小学3年生まで」から「中学3年生まで」に拡大。12月には、ひとり親家庭等の小・中学生に夜間の居場所を提供する「子どもの居場所づくり事業」をスタートしました。

5月に発表された、NPO法人エガリテ大手前の「次世代育成環境ランキング(中核市)」では、4年連続の3位から2位へランクアップしました。

【7 位】

久留米の魅力発信を強化

～アンテナショップの都内開設が決定し、くるフェスも初開催

久留米市と大川市、小郡市、うきは市、大刀洗町、大木町は県内で初めて、九州でも2番目となる連携中枢都市圏を形成する協約を、2月23日に結びました。4市2町の連携を強化し、人口の維持や地域経済の活性化に向けた、さまざまな取り組みを進めています。

その一環として、東京都港区新橋にアンテナショップを開設することを決定。構成市町の魅力発信や特産品の販売拡大等を行う情報発信拠点施設として、全国的な知名度を高めていきます。そして、観光客の誘致や移住の促進につなげ、圏域経済の活性化を図っていきます。

また、久留米の魅力発信を強化するため、4月の組織再編で総合政策部にシティプロモーション課を設置。11月23日には、福岡市役所西側ふれあい広場で、久留米の魅力を福岡都市圏の皆さんに広める「久留米フェスティバルin天神」を初めて開催し、約1万2,000人が来場しました。

【8 位】

教育改革を推進

～第3期教育改革プランを策定し、英語教育などの充実が進む

平成23年度から27年度までの第2期教育改革プランの総括を踏まえ、効果の持続と課題の解消を図るため、「ふるさと久留米を愛し、ともに社会を生き抜く力の育成」を目標に、「わかる授業」「たのしい学校」「久留米版コミュニティ・スクールの推進」の3点に重点を置いた、第3期教育改革プランが今年度からスタートしました。

プランに基づき、2泊3日のイングリッシュキャンプの開催、中学3年生全員を対象とした英語検

定料の全額負担、小学校での外国語活動や英語の教科化を見据えた小学校教員の研修の実施など、英語教育活動の取り組みを開始しました。

また、児童・生徒の学力向上に向けて、授業や校務の環境を整え、情報の共有化・一元化を図るための教育イントラネットを構築しました。

【9 位】

農業振興の取り組みを充実

～農産物のブランド化を進め、過去最大の補助を実施

TPP発効を見据え、国際的に競争力のある産地の育成のため、ハウスの整備や機械の導入など、園芸作物の生産振興に向けて、国や県の事業を活用した補助を過去最大規模で実施。県内最大の農業都市の体質強化を図りました。畜産においても、優良な血統種の導入推進のため受精卵導入に対する補助を新たに実施するなど、意欲ある農業者への支援を充実させました。

また久留米産農産物のブランド化を進めるため、11月に今年開場した福岡市の新青果市場「ベジフルスタジアム」で、うきは市と連携した柿のトップセールスを初めて実施。12月には大阪市中央卸売市場で、久留米のリーフレタスのトップセールスを行いました。

【10 位】

ふるさとくるめ応援寄付が好調

～12億円を突破する勢い

昨年に引き続き、全国から多くの寄付が寄せられ、11月末までの実績は約11億9,700万円に上りました。いただいた寄付金は、「こども生き生き応援事業」「歴史継承・芸術の推進事業」「健康・福祉事業」「花と緑のまちづくり事業」「祭・観光振興事業」などに活用しています。

寄付者への記念品は、「Made in KURUME」をコンセプトに、農産物や酒、伝統工芸品、ゴム産業商品、医療など、市内で生産されているものや、市にゆかりのあるものを多数用意。あまおうや巨峰、もつ鍋セット、ブリヂストンスポーツ社製のゴルフボール、姉妹都市である福島県郡山市産コシヒカリ「あさか舞」などが人気です。

今後もふるさと納税を通じて、キラリ輝く久留米の魅力を全国に発信していきます。

<次 点>

◎自転車が似合うまちづくりを推進

コミュニティサイクル・くるクルの利用促進に向けて、中央公園と久留米シティプラザにサイクルポートを増設。3月には、久留米サイクルファミリーパークで「サイクルチャレンジくるめ」を開催しました。また6月、自転車が似合うまちづくりにアドバイスを行う「くるめ自転車まちづくりアドバイザー」に、久留米市出身で市民栄誉賞を受賞した元競輪選手の中野浩一氏が就任。12月に行われた自転車利用活動部会に参加しました。

◎理化学研究所の機能移転へ第一歩

3月に政府関係機関の地方移転に関連した基本方針が国から発表され、市と県で提案を行っていた理化学研究所の一部機能移転が採択。「共同研究などを通じた新しい連携体制の在り方を模索する」こととされ、移転に向けた第一歩を踏み出しました。

◎25年ぶりのG1競輪を開催

2月11日から14日にかけて、久留米競輪場で「全日本選抜競輪(G1)」を開催。4日間で1万6,000人以上の皆さんが来場しました。

全国で約97億円の車券を売上げ、一般会計に2億円の繰出しを行いました。

【参考】

久留米市広報戦略会議委員名簿

議長	総合政策課長
副議長	総務部次長
	協働推進部次長
委員	市民文化部次長
〃	健康福祉部次長
〃	子ども未来部次長
〃	環境部次長
〃	農政部次長
〃	商工観光労働部次長
〃	都市建設部次長
〃	三潞総合支所次長
〃	上下水道部次長
〃	教育部次長
〃	総合政策部広域行政推進課長
〃	総務部人材育成課長
〃	協働推進部男女平等政策課長
〃	市民文化部市民センター担当次長
〃	健康福祉部保健所保健監

【問合せ先】

担当課：総合政策部 広報課
担当者：坂本、高尾
連絡先：TEL：0942-30-9119
FAX：0942-30-9702